

公開講演

## 仏誕伝説の背景

### 原 実

『史書なきインドの歴史』の上で、特定の人物の年代を論じた試みの中、過去西欧で国際研究集会の形を取ったものに1960年 A. L. Basham の主催した Kanis̄ka 王のそれがあるが、同種の集会が近時仏陀について催された。1988年4月ゲッティンゲン大学教授 H. Bechert の主催した第四回佛教研究集会 (Symposien zur Buddhismusforschung) がそれである。佛教の開祖仏陀の生存年代はキリストや孔子のそれとともに世界史の重要問題であり、又その活動年代は信者の関心事であるにもかかわらず、それを正確に確定する事は学問の現段階において不可能である。既に7世紀玄奘が入竺した時、それが最早や不明となっていた事は大唐西域記の記す所である。

『(仏滅以後の年数に就いては) 諸部に異説あり、或いは1200余年と言ひ、或いは1300余年と言ひ、或いは1500余年と言ひ、或いは既に900年を過ぐるも未だ1000年に満たずと言う』

これまで提唱された年代論は様々で、実に 2420 BC より 290 BC にいたり、我が国においても所謂『仏滅年代論』の名の下に活発な議論を呼んだ。従来一般に学界に承認されているものの中でも所謂 (Uncorrected) Long Chronology (= 南伝544/543 BC), Corrected Long Chronology (486—477=／=衆聖点記), Short Chronology (= 北伝400—383—368) の間には約200年の開きがある。久しくセイロンの所伝に拠っていた西洋の学会も近時仏滅年代を引き下げようとする機運に傾き、ここに内外の専門家を糾合して国際集会を催す事となった。その成果は同研究集会の紀要 Die Datierung des historischen Buddha (The Dating of the Historical Buddha Göttingen 1991-2) として近時出版された。

しかしながら、限られた資料によって論じる以上、そこに自ずから限界のある事は否めず、碑文その他の新資料が現れない限り仏滅年代を確定する事は将来とも不可能と思われるが、この機会に当代一流の学者がこれまでの研究を批判的に

回顧し、問題点を整理し、それぞれの立場から仮説を出し合って討論の場を持った事の意義は極めて大きい。その意味で本書は今後『仏滅年代』を論じるに不可欠の書となった。

このように正確な仏滅年代は今や知る由もないが、一方誕生から涅槃に到る80年の生涯は、多少の神秘的潤色、超人的誇張はあるにせよ、後世佛教徒が伝えた所謂『仏伝文学』によってその輪郭を知り得る。それは貧しい大工の家に生まれたキリストについて、誕生時はともかく、その後30年は不分明のまま、突然最後の短く、且つ劇的な生涯が克明に描かれるのと極めて対照的であり、豪華な王宮に生まれた王子の生涯はその誕生から少年期、青年期についてもかなり詳細に伝えられて、出家、成道、教化、涅槃に到っている。かくてその生涯は文献と図像の上からかなりの程度まで復元可能ではあるが、とかく開祖の生涯は潤色、神秘化されて、それらをそのまま歴史的事実と考える事は出来ない。資料の選別、歴史的事実と神秘的潤色の選り分けは歴史家の仕事である。

ところでその種の『神秘化』は『誕生』と『死』において就中顕著となる。何故なら前者には多かれ少なかれ『不淨』の観念が付きまとい、後者は『無常』の観念と不可分である故である。キリストの処女懐胎、復活がまさしくその例であるが、仏陀の場合でも信者の心情はこの二大事件を文学的に潤色しようとした。涅槃時における『任意捨命』の概念や仏身觀（三身説）の発達と同様に、誕生時における『仏誕の奇蹟』がまさにそれに相当している。

但し開祖の誕生にまつわる潤色、神秘化の過程にはその成立した國の文化的背景が顕著に影響を及ぼしている。既述の『任意捨命』の概念も叙事詩に類例を見る。仏誕生の神秘的物語の形成には、従ってインド固有の文化が影響していたとしても不思議ではない。ヒンズー教文化の視点からそれを見ればどのようになるであろうか。以下に仏誕伝説の記述をヒンズー教の『生苦』の概念に拠りながら解析したいと考える。

論述の順序として先ず『仏誕生伝説』を紹介し、次いでヒンズー教文献より『生苦』にまつわる章句を集めて解説し、最後に今一度『仏誕生伝説』に戻って『生苦』の視点よりそれを解析して行くであろう。

## I

今有名な Nidāna-kathā (p. 47-53) によって仏誕生の記述を見るに次の様に言

われている。

### (1) 『下天』

先ず仏はその誕生に先立ってトソツ天に在って、誕生すべき時機 (kāla), 国土 (dīpa), 地方 (okāsa), 家系 (kula), 母 (mātā) の所謂『五種の観察』(pañca-mahāvalokana) をなしたと言われる。その結果人壽百歳の時機に、闇浮提（インド国）中部なるカピラヴァスツの王族の家に、愛欲なく酒に溺れず、残りの寿命が10カ月と7日である大摩耶妃を見て、地上に誕生すべき時機が来たと判断し『下天宣言』をしてトソツ天に死し、地に降って大摩耶妃の胎内に生をうけた。

### (2) 託胎

菩薩は白象の姿を取って妃の右脇を開いて胎内に入ると、彼と妃の災禍を防ぐために四人の天子が剣を手にしてその守護にあたった。身籠もった母は男性に対する欲望を起こす事なく、心安らかに又身体に疲労を覚える事もなく、胎内の子を透明な宝珠に淡黄色の糸が通されているのを見るように眺めていた。彼の宿った母胎は神聖にして侵すべからず、他の者が宿ったり用いたりする事は出来ないから、母は仏誕生後7日にして死し、トソツ天に生まれた。他の婦人は10カ月に過不足伴い、坐り或いは臥してお産をするが、菩薩の母は丁度10カ月彼を胎内に宿して、立ったままでお産をしたと言われる。

### (3) 降誕

Lumbinī 園の Sāra 樹下に於いて立ったまま出産すると、同時に心の清浄な大梵天の4神が黄金の網を持ってやって来て、それで菩薩を受けとり、母の前に置いて祝言を述べる。一方、菩薩はあたかも法座から降りてくる説法者のように、又階段から降りて来る人のように、両手、両足を伸ばして立ち、母胎から生ずるいかなる不淨物にもまみれる事なく、清浄で純白なカーシ産の布の上に置かれた宝珠の様に、光り輝きながら母胎から出て來た。それでも尚、菩薩とその母に敬意を示すために、空中から二筋の水が流れ出て、彼とその母の体を洗って爽快にした。すると、菩薩を黄金の網に受け取って立っていた梵天達の手より、四大天王がお祝いのために選ばれた肌触りのよいカモシカの皮の覆いで彼を受け取り、更に彼ら四大天王の手より、人々が黄麻のしとねに受け取った。彼は人々の手より離れると、大地に立ち、東方を眺め、神々と人々の供養や祝言を受けた後、北方に向かって七歩歩んだ。大梵天は白い天蓋を持ち、スマーヤ天は払子を持ち、他の神々は王者の印であるその他の品を手にして従ったが、そこから七歩目で立

ち止まって、有名な誕生偈を獅子吼する。

この仏誕に纏わって A. Foucher の解説の一部を以下に紹介し、幾つかの問題点を指摘したいと考える。

古くインドでは人間が誕生するには三要素が整はねばならないと言われて、父と母との交わりと、それに中有というものが死者の世界に没して人間界に誕生する事となっている。一方、天界には『福德尽きた者を地上に落とす役人』(kṣīṇa-puṇya-nipātaka) がいて、それによって善人の魂は下降を余儀なくされるのであるが、菩薩の場合は凡人と異なり、地上に誕生するためにトソツ天に於いて死期を待つに及ばず、寧ろ彼自身自らそれを選んだ。のみならず彼は父母や、再生の時と場所を自分の意思で選ぶ事が可能であった（五種観察）。彼は六牙白象となって下天するが、それは恐らく象が転輪聖王の七宝の一であり、又後世『六牙白象本生 514』に見られる様に仏と象の親近関係によると思われる。でも入胎時は象で、出胎時は人間の姿を取っていたのはいかにも不整合のように見えるが、そこには母の夢（象）と、人間としての菩薩の誕生との混交があったものと思われる。

キリストの場合同様、菩薩の誕生にあっても『父親』の影がいかにも薄い。事実 Bharhut, Gandhāra, Amarāvatī の彫刻にあって菩薩と母は健在であっても父は不在であり、菩薩懐胎後、父母兩人とも性の交わりを慎んだと言われる。ここに我々は聖母マリヤの処女懐胎でないとしても、菩薩の場合にも性の営みが不浄であり、それを菩薩の誕生からなるべく遠ざけようとし、無垢懷妊への思いが信者の間に強かった事を看取する。

懐胎後の菩薩の記述も上に劣らず神秘的である。彼は懐胎から出産まで全期間にわたって『意識明瞭』と描かれ、母も自らの胎内に彼を見る。既述のもの以外の仏伝に、

『あたかも、宝石のビーズを通して着色された糸を見る様』

『あたかも、水晶の箱の中に猫目石の入っているのを見る様』

『あたかも、自分の顔を無垢の鏡の中に見る様』

と言われ、両者は互いに他を苦しめることがない。胎内にあって菩薩は既に一切の感官、四肢を具えた子供として描かれ、又有名な32相も具えている。彼は母とは全く独立な人格として宝石箱の中に收まり、保護されたままそこより宇宙全体を照らしている。事実、これほどに神秘化するならば、どうして初めから菩薩を神として生まれさせなかったのかという疑問が起こる程であり、その意味で彼は

他の人間の様に母の胎内に10ヵ月も住む必要はなかった筈である。にも拘わらず彼が尚人間として描かれているのは何故であるか。そこには菩薩があくまで『人間』として生まれ『人間』として悟りを開くという仏伝作者の意図が働いていた。その意味で彼らの菩薩の記述は神と人の混交 (Hybrid) に他ならない。

さて、母が無憂樹に触れると、菩薩は母の右腋より誕生したと言われるが、右腋からの誕生は古代インドの武勇神 Indra のそれと軌を一にしている。のみならず、菩薩の誕生時に種々の奇蹟が生じた。悪徳は去り、病なく、飢餓なく、盲聾等の障害も治ったと言われるのは、マタイ伝の記述を想起せしめる。又、誕生時に菩薩を受領するに値するものは天人のみであり、或る仏伝によれば帝釈天と梵天が産婆の役をなしている。神々は大王の印である天傘と払子を頭上に奉持して菩薩にかしづき、又同一文脈に四天王も現れる。更に生まれ落ちた時、彼が地面に接触するのを避けるため、地面より蓮が生え、菩薩はその上に立ったとも伝えられている。自然に天より二種の水が流出して彼の身体を清め、龍王その他が彼に奉仕したとも伝えられる。彼は生まれた途端、既に『歩行』と『演説』が可能であり、それらは『七歩』と『誕生偈』に象徴されている。

以上、菩薩の懐胎から誕生に到る幾つかの特異点に言及したが、それらは更に『生苦』を解説した後に再び取り上げるところとなるであろう。

## II

上の仏誕生伝説を踏まえて、次に『生苦』の検討に移る。一般に『四苦八苦』と言われる中に生老病死が数えられる事は周知の通りである。この中、老病死の三者は人間日常の経験に従事して凡そ見当がつくが、『生苦』に就いて筆者は久しくこれを理解する事が出来なかった。にもかかわらず大智度論14には

『是故仏言。一切苦中生苦最重』

と言われ、又清淨道論にも

『何ぞ多言を要せんや。あらゆる苦は何時、如何なる所にありとも、これ生を離れて (jāti-virahena) ついに有る事なし。故に大仙は生をば第一の (sabba-pathamam) 苦と説きたまう』 (p. 501, 33)

と言っているから、四苦の中でもそれが極めて重要であった事は確実である。しかばそれは何故にかくも重要な事であったか、以下にその点を解明して行くであろう。

ところで、大智度論の上の文言の前に

『一切衆生常有衆苦。処胎迫受諸苦痛。生時迫迮骨肉如破。冷風触身甚於劍戟』

と言われて『胎内苦』と『出胎苦』を指示している様に見えるが、この二を含めて『生苦』に言及しているヒンズー教の文脈を以下順を追って可能な限り紹介したいと考える。

ところで、そもそも筆者が最初に『生苦』の記述に接したのは四半世紀前 *Pañcartha-bhāṣya ad Pāśupata-sūtra* を読んでいた時であった。そこには五種類の『苦』が説かれ、その中に『生苦』は次のように記されている。

#### (1) *Pañcartha-bhāṣya*

又、同様に五種の苦がある。胎内苦、誕生苦、無知苦、老苦、死苦がそれである。その中で先ず胎内苦とは、この個我は母のお腹の中に体を据え、破損した車の中に居る様に、密閉の苦労を経験しつつ、狭い仕切りの中で屈伸も自由でなく、一切の動きを封じられている。かくて扉なき暗黒の中で意識朦朧、牢獄に繋がれている如くで、個我は必然的に苦を経験する。何故であるか。彼は意識を有する故に、又経験の主体である故に、又それより成っている故に。身体、感官はしからず。何故であるか。それらは意識を有せざる故に、又経験の主体でない故に、又それより成っていない故に。同様に誕生苦は次のようである。個我は糞の堆積に顔を沈め、尿の雨に灌がれつつ、出口の閉まった（母の）体内で、産道（yoni）通過の隘路にいたく痛めつけられ、骨、急所、関節を押し潰されながら、泣きわめきつつ生まれて来る。その後、又しても彼には凡そ不慣れな外の風（bāhya vāyu）、誕生旋風（janmāvarta）に触れられると激痛が起こる。そしてそれによって彼は前世に始まる（一切過去世の）記憶の原因たる潜在印象（saṃskāra）を喪失する。かく個我のみが生苦を経験するのである。何故であるか……

同様に無知苦は次のようである。自我意識を持つ身体は、一体自分が誰であるか、何処から来たのか、誰の子か、誰の親族かを知らないでいる。何を為すべきか、何を為さざるべきか、何を食うべきか。何を食うべきでないのか、何を飲むべきか、何を飲むべきでないのか、何は真で何が嘘か、何が知で何が無知か、というように無知の苦を経験する。何故であるか。……

この後、残余の老死の苦が語られるが、本題に関係する所がないのでその部分を省略し、以下に類似の『生苦』の記述を幾つかの *Purāṇa* 文献より紹介する。上の記述に最も近いものとして *Viṣṇu-purāṇa* (=Brahma-purāṇa) のそれがある。但し、苦はここで五種でなく六種とされ、文章も上の散文と異なり、韻文

で綴られている。

### (2) Brahma-purāṇa

胎内苦，誕生苦，老苦，無知苦，死苦，地獄苦。更に苦には幾千の区別がある。個我(jantu)は纖細な身体を具えて，極めて汚れたる胎内に皮膜に覆われ，背，頸，骨を曲げ，ずんぐりした形で宿っている。母の摂取する極度の酸い，辛い，苦い，熱い，塩辛い食物はいたく彼を苦しませ，それらによって果てしなく日々増大する苦痛を経験する。手足の屈伸等も自由にならない。八方痛めつけられながら彼は糞尿の大池に身を横たえている。呼吸する事も出来ない。意識を有する彼は自らの業に縛られ，この極度の苦痛と共に胎内で過去幾百の誕生を想起している。生まれ出る時，彼は糞尿精血にその顔がよごれ，誕生風(prājāpatya)により骨，関節を痛めつけられ，更に強い分娩風(sūti-māruta pl)により逆立ちの姿勢にさせられる。辛うじて母胎の外に出た時，彼はへとへとになっているが，生まれ落ちるや外の風(bāhya vāyu)に触れられてたちまち失神し，知(vijñāna)を失ってしまう。次でその身を刺され，鋸で轢かれる思いで，彼はあたかも悪臭を放つ傷口より大地に落ちた蛆虫(krimika)の如くである。彼は痒くとも搔く事あたわず，思い通りにならずに転々とし，乳房を吸うなどの行為も他人の意思のまま，汚い寝台に眠り，虫やアブにさされてもそれらを払う事すら出来ない。生苦は無数，又他の生もしかり，幼子(bāla)となっては外界に基づく苦をも経験する事となる。

無知の暗黒に覆われ，内官は意識不明，彼は自分が何処から来て，何処へ行くのか，又自分が何者であるのかも判らないでいる。係累は誰か，何をなすべきか，なさざるべきか，何を言うべきか，言わざるべきか，何が法で何が非法か，何が徳で何が過失か，彼は判らない。かくの如く人間は食と性にかられ動物と同様，意識転倒して大なる無知苦を経験する。(Brahma-purāṇa 234. 9-24)

### (3) Mārkandeya-purāṇa

文意尚必ずしも明確でないが，以下にこのプラーナの該当部分を訳出する。

男の種子は灌がれ，女の血の中に蒔かれる。射精の直後，地獄か天国より解放されたもの（靈魂？）が入ってくる。（父母）二つの種子はそれに支配されて固形となり，kalala, budbuda, pesi の状態となる。Pesi よりあたかも種から芽が出るように，芽が出て，五肢分（手足頸）がそれぞれに生ずる。次いでこれら（五）肢分より指，眼，鼻，口，耳という副次的肢分が生え，それらより爪等が生える。皮膚には体毛，次いで髪が生ずる。胎は成長する中身と共に大きくなる(5)。

胎児は母の胎内で臍の緒(āpyāyinī nāḍī)を通して栄養を摂取し次第に成長する。そのうちに彼は意識を有する様になる。

（過去に経験した）沢山の輪廻の境位が彼の記憶に蘇って来る。彼はあれこれ悩まさ

れて嫌氣 (nirveda) さす (13)

(彼は考える)『この（母の）お腹から出たら、もうこんな事は二度と繰り返すまい。

再び胎内に入る事のないように私は努力しよう』と、(14)

運命の致す所、以前に経験した幾百の生苦を思い出しては思案する (15)。

すると時経て個我は回転して逆立ちの状態になり、9—10月目に誕生する (16)。

生まれ出る時、彼は誕生風 (prājāpatya vāta) に悩まされる。心臓に締めつけられるような苦を経験しながら、彼は泣き叫びつつ生まれ出る (17)。

出胎後、彼は耐えがたい失神を経験するが、(外の) 風と接触 (vāyu-sparśa) して意識を回復する (18)。

すると又しても意識を眩ませる Viṣṇu の幻力 (māyā) が彼を襲う。それによって眩惑されて彼は知 (jñānā) を喪失する (19)。

知を喪失して個我は嬰児（馬鹿）の状態になる。それより少年期、青年期、老年期を経て (20)，死期を迎える、人間は同じ様に誕生し、輪廻の輪 (samsāra-cakra) の中で井戸の釣瓶の様にさすらう (21)。

ここに所謂『胎内の五位』の用語が見えるのみならず、胎内に於ける胎児の『解脱志向』が述べられる。

類似の『胎内の五位』と胎児の『解脱志向』は他の文献にも見える。以下にこれらを順次解説するであろう。

#### (4)Garbha-Upaniṣad

排卵期に交接すれば一夜にして kalala, 7夜にして budbuda(泡), 半月にして piṇḍa(肉塊), 一月にして kathina(堅い実)となる。2カ月にして頭生じ, 3カ月にして足, 4カ月にしてくるぶし, 腹, 腰生じ, 5カ月にして脊髄, 6ヶ月にして口, 鼻, 眼, 耳が生じ, 7カ月目には jīva と結合する。8カ月目には一切の相 (lakṣaṇa) を具えるに到る。9カ月目には感覚器官が具備するに到る。そこで彼は以前の誕生を想起し、(以前に自分の為した) 清不淨の業を発見する。(彼が経験した) 幾千の以前の母の胎を見て(彼は想起し、且つ思惟する。)

『自分は色々な食事を食し、色々な乳房を吸った。生まれては死に、何度も誕生を繰り返した。私が周りの人の為になした清不淨の業によって今私は焼かれている。彼らは(それぞれの) 果報を受けて去って行ってしまった。何と、苦海に沈淪して為すべき術を知らない。若しこの母の胎より出たら、今度は不淨を滅し、その結果解脱を与えたまう大自在天に縋ろう。不淨を滅し……Nārāyaṇa に帰依しよう。又不淨を滅し……Sāṃkhya Yoga を修めよう。不淨を滅し……永遠なる梵 (brahma sanātana) を瞑想しよう』

ところが、陰門 (yoni-dvāra) に近づくと、いたく締めつけられ苦しむ。辛うじて誕

生するや、しかし彼は Viṣṇu 風に触れられて（胎内で見た）幾千の生死を想起せず、又淨不淨の業を見つける事（が出来）ない。

#### (5) Agni-purāṇa (369. 19—27)

個我 (jīva) は胎内 (garbha) に入り（一箇月間）そこに kalala として留まり、二箇月目に塊 (ghana) となり、三箇月目に諸部分 (avayava)，四箇月目に骨と皮膚と肉、五箇月目に体毛が生じ、六箇月目に意識 (cetas) を具えて、七箇月目に苦を感受するに到る。……彼がその胎内に住んでいる女の事を彼は知っている。彼は人間としての誕生の経緯を最初から總て知っている。しかし、真っ暗な中で彼は大いに苦しむ。七箇月目に彼は母の飲食を摂取するが、八九箇月目に彼はほとほと嫌になる。母の性交に悩み、母病めば共に病み、瞬時も百年の如くである。彼は業に悩まされ、胎の山を越え出れば、必ず梵解脱知 (brahman,mokṣa-jñāna) を修めようと心に決める。ところが（月満ちて）分娩風 (sūti vāta) により逆立ちにされ、産道の狭隘に悩まされつつ胎外に出ることを得るが、（その後）一箇月間、彼は（他人の粗野な）手の接触に苦しむ。

#### (6) Pretakalpa 6.1-32=/=Bhāgavata purāṇa 3. 31. 1-11.

男の精は女の胎に入り、一夜にして kalala、五夜にして budbuda、十日にして karkandhū。或いは peśyaṇḍa となり、一箇月後に頭、二箇月後に手足等の四肢、三箇月後に爪、体毛、骨、皮、性器、肛門が整い、四箇月後に七要素（栄養液、血液、肉、脂肪、骨、髓、精子）、五箇月目に飢渴が現れ、六箇月目に卵膜に覆われて（母の）右腹にて胎動を始める。母の摂取した飲食によって7要素は成長増大する。彼は生類誕生の場には凡そ相応しからぬ糞尿の溜まり場に横たわっている。繊細なるが故に、そこに巣くっている飢えた蛆虫共に毎時全身傷つけられ、たちまち激痛を感じて失神する。母の食べる甚だ辛い、酸っぱい、熱い等の食事の影響下、彼は全身に苦痛を覚える。……籠の中の鳥の様に自分の四肢を動かす事も自由にならない。するとたまたま（前世の）記憶が蘇り、（過去）百生の間（に己が為した）業を想起しつつ、どうしたら安息を見出せるものかと、深く溜め息をつく。

七箇月目以来、彼は意識を具える (labdha-bodha) ようになるが、分娩風 (sūti-vāta) に煽られ、糞より生じた蛆虫の様に一箇所に留まる事がない。彼は恐れて助けを求め、声を震わせて合掌なし、己を胎内に置いた主を讃える (11)。

Preta-kalpa … Bhāgavata-purāṇa はこの後、読みを完全に異にしているが、何れにしても個我は Viṣṇu 神を讃えて、輪廻を厭い、解脱を求め、神に帰依する。

胎内でこの様に決心し、神を讃えていると、十箇月目に分娩風 (sūti-māruta) は誕生さすために突然彼を降下せしめる (22)。それによって彼は突然頭を下にさせられ、

苦しくて、呼吸も出来ぬまま辛うじて外に出るが、彼はその時記憶を失ってしまう (*hata-smṛti*)。あたかも蛆虫が糞尿の上に落ちる様に彼は大地に落ちて蠢くが、知 (*jñāna*) を喪失し、(己の意思とは) 反対の境遇に行かされて、泣き叫ぶ。彼は彼の気持ちも知らないでいる他人の意のままに養育され、嫌な事に出くわしても、自由意志なきまま拒否出来ない。汚い、汗まみれのベッドに寝かされて、四肢を搔く事も、起臥すら自由に出来ない。彼の柔らかいなまの皮膚を蚊、アブ、床虫等が叩く。知 (*jñāna*) を喪失し、泣きわめきつつある彼を、あたかも大きな蛆虫の群れが新生の蛆虫をつつく様に (27)。

(7) *Nārada-purāṇa* 1. 32. 10-25.

*Nārada-purāṇa* は植物、蛆、動物、鳥の苦を説いた後、人間としての誕生とその苦に言及する。

個我は父の精と共に母胎に入り、五日後 *kalala*、半月後 *palala*、一月後 *prādeśa* の大きさとなる (10)。それ以来、精神性 (*caitanya*) なくとも、風のまにまに母胎の中で、耐えがたき熱の苦しみの故に一箇所に留まる能わず、蠢いている (11)。二箇月が満ちた時、ともかくも人間の形を整え、三箇月が満ちた時、手足等の部分 (*avaya-va*) が造られ、四箇月目にはこれら一切部分の区分が明瞭となり、五箇月目に爪が出来、六箇月目に爪がきちんと区分される。

臍の緒により養育され、母親の不浄且つ嫌悪すべき身体の中に、その尿に灌がれている自我を見出し、またそれは母の摂取する極度に辛い、酸っぱい、熱い等の食べ物に悩まされている自我を見ていると、彼 (*dehin*) は前世の記憶 (*pūrvajanma-smaraṇa*) を得て、以前に経験した地獄の苦を想起し、内心の苦に焼かれつつ、心 (*manas*) の中で語り嘆く。

『前世に於いて我は極道者であった。召使、子孫、友、家、畠、財産、穀物等にいたく愛着した故に、又妻の扶養のため、他人の財産、畠等を略奪し、又愛欲に盲目となって他人の妻を奪うなどして大罪を犯し、その悪業の結果、一人でこの様な地獄を経験し、更に植物等となって大苦を経験し、今や卵膜に覆われて内の苦、外の熱に悩まされている (13)。私が扶養した妻は自分の業の故に別の方へ行ってしまった (14)。……以前、他人の幸福を見て嫉妬に悩まされた (17)……身口意三業にわたって他人を苦しめた。その悪によって私は今一人で苦しみ、焼かれているのだ。 (18)

このように胎内で独り色々嘆いていた後、彼は決心する。

(今度) 誕生したら直ちに善人と交わり、Viṣṇu の所行を聴聞し、清い心の持ち主となって、善業を修め、輪廻を絶つ原因たる *Nārāyaṇa* を *bhakti* を籠めてその蓮の様な足に額ずいて、輪廻を絶つ原因であり、ヴェーダの秘義、ウパニシャドによって

明らかとなる、この全世界の帰趣たる神を心に念じて、この苦しい輪廻の牢より脱出しよう』

(しかし) 母の分娩時になると、[彼は風に悩まされ、母にも苦痛を与えつつ、業の綱により力ずくで産道より出されて、一切の拷問を一度に経験する (21)。産道の隘路に悩まされ、この大苦により母胎より出る時意識を失う (niḥsamjñā) (22)。しかし、外の風が彼を蘇生さす。外風に触れられた途端に彼は記憶を喪失し (naṣṭa-smṛti), 知 (jñāna) 喪失の故に以前経験した全ての苦、又現在の苦も判らなくなり、この上なき苦を経験する (23)。この様に馬鹿 (bāla) になってしまって、自分の穢れや尿に濡れて、苦を嘗めつつも語る能わず、飢渴に悩み泣き叫んでいると、(他の人達は)『乳を遣らねば』と思って手を下す。肉体保持も(一切)他人任せのまま、アブ等が噛んでもそれらを払う事すら出来ない (25)。

以上はヒンズー教文献の『生苦』の記述の中から主なものを紹介したが、仏典にあって類似のものを挙げれば以下の如くである。先ず有名な俱舍論の中に、既述の『胎内の五位』(pañca garbhāvasthā) を中心に次の様に記されている。

(9)Abhidharmakoṣa 3.19, (Pradhan p. 130)

最初に kalala 生じ、それより arbuda, それより pesī, 次いで ghana, 更に prāśākhā。毛髪、体毛、爪等、感覚器官、個別的な姿形。

時経て、母胎内に業の異熟より風 (vāyavah) が吹き出でて胎児を転がし、産門に向かわしめる。胎児は硬い糞の魂の様に元の位置より落下し、苦痛甚だしい。

母の不注意により胎内で死ぬと、産婆達が彼を母胎の外に引き出す処置をするが、その間に母の胎内は漢訳によって次の様に描出されている。

内如糞抗 (varcas-kūpa), 最極臭悪 (ugra-durgandha), 雜穢充塞 (samala-palvala), 黒闇 (andhakāra), 所居無量千虫之所依止 (subahu-krimi-kula-sahasrā-vāsa), 常流惡汁 (nitya-srāvin), 恒須対治 (satata-pratikriya), 精血垢膩潰爛欄臭滑不淨流溢 (śukra-śoṇita-lasikā-mala-saṃklinna-viklinna-kvathita-picchala), 鄽穢難観 (parama-bibhatsa-darśana) .....

一方、安産にて誕生しても息子を望む母、或いは侍女達は、生傷の様になっている生まれたばかりの彼 (taruṇa-vraṇāyamānatmā) を、刀、剃刀の様な接触を有する (śastra-kṣārāyamāṇa-saṃsparśa) 両手によって、取り出しては沐浴させ、乳を飲ませ、順次美食を取らしめ馴らさせる。

ここに言及される kalala 以下八つの位相は瑜伽師地論卷2 (p. 284) に『胎藏八位差別』(kalala, arbuda, pesī, ghana, prāśākhā 髮毛爪位, 根位, 形位) と称せられるものに呼応しているが、同様の八段階は『金七十論』の kalala, arbuda,

peśī, ghana, 嬰外, 童子, 少壯, 衰老にも見える。

一方パーリ仏典にあっても『生苦』が言及される。今、有名な清浄道論を水野弘元博士の邦訳により紹介する。

(10)清浄道論 (Visuddhi-magga, PTS. pp. 500-501)

その中で入胎 (gabbhokkanti) に基づく苦に始まる各種の苦が順次説明される。

有情が母胎中に生ずるとは青蓮, 紅蓮, 白蓮等の中に生ずるのではなく, 胃の下, 腸の上に, 腹壁と脊髓との中間の極めて狭い (parama-sambādha), 真っ暗な (tib-bandhakāra) 種々の悪臭の充満せる最極悪臭ある (nānā-kunapa-gandha-paribhāvita-parama-duggandha-pavana-vicarita), 甚だ厭うべき (adhimatta-jegucha) 場所に生ず。あたかも, 腐魚, 腐粥, どぶ池等に蛆虫 (kimi) が生ずる如し。彼はそこに生じ, 10カ月の間, 母胎に発生する熱により, 袋に入れられた煮物の如く煮られ, 麦団子の如くに蒸されつつ, 屈伸をなすこと能わず, 甚だしき苦を嘗める。これ入胎苦 (gabbhokkanti)。

胎児は母が急に躊躇, 歩き, 坐り, 立ち上がり, 回転する等の場合には, 酒に酔うた者の手中にある子山羊の如く, 又蛇使いの手中にある子蛇の如く, 引っ張られ, 引き回され, 押しつけられ, 押しやられる等の目に遇って甚だしき苦を嘗める。又母が冷水を飲む時, 八寒地獄に生まれる如く, 又熱い粥や食物等を飲み込む時には火の雨が降ってきた如く, 辛い, 酸い等を飲み込む時には身を傷つけて灰汁を擦り込む懲罰を受けるが如き, 甚だしき苦を嘗める。これ(正常妊娠にて) 胎児に注意せる苦 (gabbha-pariharaṇa)。

次に異常妊娠 (gabbha-vipatti) にあって, 死産の胎児に上記の俱舍論と類似の記述が見られ, 記述は『出胎苦』に移行する。

母が(胎児を) 出産しつつある時には, (産門に向かう為に) 業生の風 (kammaja vāta) によって回転せしめられ, 地獄に落ちるが如く, 甚だ恐ろしき産道 (yoni-magga) に向かいつつある(胎児)は, 例えは, 鍵穴より引き出されつつある大龍の如く, 押し寄せ来る両山の間に粉碎されつつある地獄有情の如く, 極めて狭き産門 (yoni-mukha) によりて苦を受ける。これ出産 (vijāyana) による苦。

次に, 既に生まれた者の軟らかい身体は生傷の如く (taruṇa-vāṇa-sadisa-sukhumāla-sarira), 手に取られ, 淋浴させられ, 洗われ, 布にて拭かれる時には, 針の先や剃刀の刃 (sūci-mukha-khuradhārā) で刺され, 裂かれるが如き苦を受ける。これ母胎より外に出たる (bahinikkhamana) による苦。

苦の記述は尚続くが『生苦』より離れ行く故にここでは省略する。清浄道論は最後に韻文によって結んでいる。

『畜生界に生まれるも苦，餓飢界，阿修羅界に生まれるも苦。又糞尿地獄 (gūtha-naraka) の如き母胎 (mātu-gabbha) にて，有情が久しく住し，次いで外に（生まれ）出でつつ，受ける所の甚だ恐ろしき苦なるものも，生なればある事なし，故にこの生も苦なり』

『何ぞ多言を要せん，あらゆる苦は何時，いかなる所にありとも，これ生を離れてはついに有る事なし。故に大仙はこの生をば最第一の苦と説きたまう』

漢訳『解脱道論』卷第七には kalala, arbuda, pesi, ghana の相当語が見える（大正 p. 433）。

### III

以上我々はヒンズー教典籍に見える『生苦』の記述を概観し，主要仏典の類似箇所を参照したが，ここで我々は人間の胎に生を享けた者の『出胎』を境として，それ以前とそれ以後の状況を対比してみる必要がある。以下にその点を巡って論述を進める。

細部の異同をさておき，これらのヒンズー教文献は少なくとも『生苦』をして『知』の喪失を惹起せしめるものとしている点に於いては互に共通している。そしてそれらの章句は，出胎前の胎児に『輪廻の厭離』『欣求解脱』の『知』や『悟り』を具えた祝賀すべき精神状態を説き，それに反して出胎後にはその喪失と，あらゆる種類の悲惨な状態を帰せしめて，両者を対比させている。そしてこの両者の間に介在しているのが『生苦』である。『生苦』によって人間は，出胎以前に胎児が胎内で保持していた『前世の記憶』を喪失し，胎内における殊勝な心掛けも，あわれもとの木阿弥となる。

仏典でも Abhidharmakośa, Visuddhimagga の類は『生苦』を説いているが，この両書は，上に見たヒンズー教典籍のように，『生苦』に『輪廻の嫌惡』『欣求解脱』に特徴づけられる『前世の記憶』の喪失を帰してはいない。しかし，それを説くものは漢訳仏典に少数見え（例えば大方等大集經24〔大正 p. 169, 6〕）ジャイナ文献では明らかにそれを説いている (Tandulaveyaliya 25 tena dukkhe-na sammūḍo jaim sarai n'appano)。

### IV

以上述べた凡人の経験しなければならない『生苦』（胎内苦と出胎苦）を踏まえ

て、最後に今一度仏誕生伝説に立ち帰り、両者を比較するとどの様になるかを検討して、本稿の結論とする。

今、便宜上、上の第二章に述べた『凡人』の誕生と、第一章に述べた『仏』の誕生を表示して対照してみると次の様になる。

## 『凡人』

- 1 胎内の五位と最終段階で意識入る
- 2 胎内苦、母 *dohada* (4月日)
- 3 胎内不淨 虱、糞
- 4 母子互いに苦しめ合う
- 5 誕生風、逆立ち、産道通過
- 6 生まれ落ちる（蛆が糞の上に）
- 7 汚い寝台、蚊、アブ
- 8 歩行不能、他者依存
- 9 泣き叫ぶ、意識不明

## 『仏、菩薩』

- 最初より意識あり、五種観察
- 心身爽快
- 不淨皆無
- 苦しめ合う事なし
- 四天王守護、産門を通らず右腋より
- 天人が受けとめる、不淨皆無
- 二種類の水、天蓋、払子
- 七歩歩く、独立自尊
- 誕生偈、一生補尅

この対照表を中心として、以下解説を施すであろう。

先ず第一に、凡人の場合、彼らは胎内の五位 (*kalala, arbuda, ghana, peśi prasākhā*) 乃至は八分差別 (これに髪毛爪位、根位、色位を加える) を経過する。そしてその終末期に胎児は『意識』 (*caitanya*) 乃至『知』 (*jñāna*) を付与される。

(医学文献では *dohada* は四箇月目に胎児の心におこるという)。仏はこれに反して『意識』『知』を入胎の最初から持っていた。彼はトソッ天にあって既に誕生以前『五つの観察 (*pañca-mahāvaloka*)』を為し、*Māyā* 夫人を選んでその胎内に入り、10ヶ月滞在し、出胎するが、その全過程に於いて常に意識を有していた (*sato sampajāno*)。

第二に、凡人は胎内に住んでいる間、苦を経験する。彼は真っ暗な、出口のない部屋に閉じ込められ、屈伸も自在でない。彼は母の性交、飲食にいたく悩み苦しむ。又彼も母を苦しめる。仏は安楽に母胎内に住み、母は心身健康、悪徳、欲望の類から離れ、母子が互いに苦しめ合うが如きは全くなかった。

第三に、凡人は胎内にある時も出胎の時も『穢れ』に悩まされる。精子と血液に塗れ、糞尿の中に顔を埋め、悪息ふんぶんたるどぶ池に身を置くに等しいと言われる。出胎の様は蛆虫が悪臭ひどい傷口より落ちるに譬えられる。仏はこれに反して、一切の不淨より自由で (*amrakṣita*)、彼の胎内住は宝石箱内の猫目石、

ベナレス羊毛の上に置かれた宝石、無垢の鏡に映る自分の顔の如しと言われ、母子は互いに他を美化し合ったと言われる。

第四に、凡人の場合、彼が生まれて大地に落ちる様は、蛆虫が傷口より糞尿の上に落ちる如しと言われる。彼は汚い寝台に寝かされて自由意志なきまま、他人の手荒な処置に身を任せねばならぬ。沐浴、食事も一切他人任せで、嫌でもこれを拒否する事が出来ない。仏の場合は、生まれるや、それは人間でなく天人の金の網で受け取る所となつた。彼は自ら既に一切の穢れを払っていたにもかかわらず、更に天より下る二つの水流により清められた。

第五に、凡人は汚い寝台の上に寝かされたまま、寝返りする事も出来ない。蚊やアブが彼の柔らかい皮膚を容赦なく刺すが、これを払うことも、また刺された所を搔くことも出来ない。仏は、これに反して、美しい寝台に受け止められ、四天王が彼を虫その他から守つた。梵天と帝釈天が天蓋と払子を持って彼に奉仕し、又龍 (nāga) が奉仕して蚊やアブを払つてゐる。

第六に、この先の事件、即ち仏の七歩と誕生偈の宣言は、それ自体奇蹟的でありそれ以上の説明を要せず、仏は凡そ凡人の比ではない。プラーナ文献は新生児が寝返りさえ叶はず、虫を払う事も、搔く事も出来ぬと言い、七歩歩むには程遠い。又宝物集その他に言うように産声は『苦かな』の述懐に他ならず、彼はただわめき叫ぶのみ、況んや『誕生偈』宣言等思いもよらない。

第七に、上記の仏の誕生を彩る特徴 6 種よりも、より以上に重要な事は彼が産道を通過せず、その狭隘な道を通らず (ayonija) 母の右腋より誕生したと言う事実である。もとより超人は凡人と異なるから、その誕生の仕方も非凡であつても良い道理であり、事実 Indra は仏と同じく母の右腋より誕生したと言われ、古仙の中には母の股 (Aurva), 手 (Pr̥thu), 頭 (Māndhāṭr), 腋の下 (Kakṣīvat) より生まれた者もある。古代の神や仙人、帝王の例にならつて仏の誕生をそれらになぞらえようとする仏伝作者の意図を汲む事ももとより可能であるが、既述のヒンズー教文献の生苦の記述に従つて見る時、我々は仏誕生伝説の作者達が仏を『生苦』より救い、それと無縁のものたらしめんと意図しているのを看取する。と言うのも、若し仏が一般人のように『産道通過』することなく、a-yonija であるならば、彼は、さもなければ一切の潜在印象 (saṃskāra) を払拭して、新生児を『馬鹿』 (bāla) たらしめる『生苦』 (janma-duḥkha) を全く経験しないで済んだ事になる。そしてこの仏が『生苦』を免除されていた事実は、更に胎児が母胎

内で誕生以前に有していた『前世の記憶』(smṛti), 崇高なる『知』(mati, jñāna)を保持する特権を保証した。上に見たように, 胎児は母の胎内にあって, 過去幾百の輪廻の数々を想起し, その苦に厭離し(nirveda), 『今度、誕生の暁には二度とこの輪廻の世界に舞い戻るまい, そのため自分は Maheśvara, Nārāyaṇa にbhakti を籠めて帰依しよう, Sāṃkhya-Yoga を修めよう, 永遠なる梵(brahman) を瞑想しよう。今度こそ最後の誕生としよう』といった殊勝な心掛けを吐露している。不幸にして, この崇高な決意は『生苦』によって完全に壊滅し, それは却って彼に悲惨と痴呆化を結果した。仏の場合には, 彼が ayonija であったお蔭で, 胎児が胎内で修していた崇高な決意は誕生後も保持され, それが有名な『誕生偈』となった。その最後の部分, 即ち『これは私の最後の誕生で, 二度と生まれる事はない』としている部分は, 上に見た胎内の児の崇高なる決意の延長線上に位する様な印象を我々に与える。

若し, 仏伝作者の仏の神秘化に土着文化の或る要素が影響しているとすれば, その神秘化の過程は, ヒンズー宗教文献に種々様々に描かれる『生苦』のインドの一般的文化背景によって色濃く彩られていたに違いない。この企画意図は, パーリ所伝の仏伝よりも, 梵文仏教文献(Mahāvastu, Lalitavistara, Buddhacarita)になかんずく顕著に看取される所である。仏が母の右腋より誕生したという物語部分が梵文仏伝にのみあり, 南伝に欠落しているとするならば, それはセイロンのパーリ南伝の佛教徒が仏を『生苦』より救う必要がなかった事を意味している。それに反して, インドの地にあってはヒンズー教徒にあまねく知られていた『生苦』から佛教の開祖釈迦を救う必要があった事になる。しかしこの点はより優れた仏教学の専門家の研究分野に属し, 筆者の如きが論じ得る問題ではない。ここではただ, ヒンズー教の文献から仏典の特殊問題への解釈の一可能性を指示するに留まる。

但し, 上の比較対照には文献成立の時代考査が必要となる。不幸にして上に引用したヒンズー教文献はそのいずれもが成立年代を確定し得ない。文献によってはかなり後代に属するものがある。後世の文献の記述と仏伝とを同一平面に置いて比較する事は時代錯誤の誹りを受けるであろう。筆者はもとよりその誹りを受ける用意がある。しかし, 文献に見えている思想がその当時初めて現れたものとは限らない。それがどこまで遡り得るかは別の問題であるが, これまた推測以上には出ない憾みがある。上は唯, 世間に流布する『仏誕生伝説』を『生苦』の記

述と比較して、或る一つの解釈を提唱せんとするに留まる。

(あとがき) 本稿は筆者がかなり以前に発表した以下の二つの論文に拠つてゐる。

- (1) 『生苦』玉城康四郎博士還暦記念論文集『仏の研究』(春秋社 1977), pp. 667~683.
- (2) "A Note on the Buddha's Birth Story," Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Etienne Lamotte, Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain 23 (Louvain 1980), pp. 143-157.

尚、『胎内五位』その他の術語について次の研究論文がある。

C. Suneson, "Remarks on some interrelated terms in the ancient Indian Embryology," WZKS 35 (1991) pp. 109-121,

但し、術語の出入り、比較研究に、より精細な検討が必要であろう。

最後になったが、この論稿を発表する機会を与えられた駒沢大学の奈良康明、田中良昭、岡部和雄の三教授に深甚なる謝意を表する。